

研究成果報告書

(国立情報学研究所の民間助成研究成果概要データベース・登録原稿)

研究テーマ (和文) AB		東日本大震災後の地球温暖化政策を考える:炭素税再考			
研究テーマ (欧文) AZ		Climate Change Policy Reexamined after the Great East Japan Earthquake			
研究氏 代 表 名 者	カカナ CC	姓)オクシマ	名)シンイチロウ	研究期間 B	2014~2016年
	漢字 CB	奥島	真一郎	報告年度 YR	2016年
	ローマ字 CZ	OKUSHIMA	SHINICHIRO	研究機関名	筑波大学
研究代表者 CD 所属機関・職名		筑波大学システム情報系社会工学域・准教授			
概要 EA (600字~800字程度にまとめてください。)					
<p>東日本大震災後「エネルギー新時代」を迎えた我が国において、①家計のエネルギー費用負担増に対する脆弱性、②節電等に見られたような人々のモラルモチベーションに基づく環境配慮行動が注目されている。これらは、パリ協定以降の望ましい地球温暖化政策のあり方、特に外部性課税のあり方について熟考や再考を強く促すものである。そこで本研究では、これら二つの観点から、今後の地球温暖化政策を評価するために必要な新しい概念、手法について考察した。具体的には、エネルギーに関する貧困を評価するための新しい概念や指標の開発、加えて、カント的道德モデルを応用した分析用モデルの開発を行った。</p> <p>第一に、エネルギーに関する貧困に関しては、新しい指標の構築などを行い、我が国を対象とした実証分析を行った。その結果、2000年代以降、特に東日本大震災以降、我が国においてエネルギー貧困率や脆弱性(貧困への陥りやすさ)が上昇していることを明らかにした。特に単身高齢者世帯と母子世帯が脆弱であり、2013年には同世帯の約四分の一がエネルギー貧困に該当した。加えて、独自の要因分解手法を用いてエネルギー貧困率上昇の寄与度を算出した結果、東日本大震災前は所得の低下、大震災後はエネルギー価格上昇がエネルギー貧困率上昇の主因であることを示した。</p> <p>第二に、人々のモラルモチベーションに基づく環境配慮行動に関しては、節電を対象とした実験を行った。その結果、金銭的動機に対応した情報以外にも、カント的道德、モラルモチベーションに対応した情報を適切な形で与えることによって、個人の節電行動をかなりの程度促すことができることを示した。</p> <p>今後、効果的な炭素課税(価格インセンティブ政策)の導入、強化を考える際には、以上のような点を踏まえて、適切な炭素価格水準、再分配政策を考える必要がある。</p>					
キーワード FA	エネルギー	貧困	脆弱性	環境モラル	

(以下は記入しないでください。)

助成財団コード TA					研究課題番号 AA								
研究機関番号 AC					シート番号								

発表文献（この研究を発表した雑誌・図書について記入してください。）									
雑誌	論文標題 <sup>GB</sup>	Measuring Energy Poverty in Japan, 2004-2013							
	著者名 <sup>GA</sup>	Shinichiro Okushima	雑誌名 <sup>GC</sup>	Energy Policy					
	ページ <sup>GF</sup>	557~564	発行年 <sup>GE</sup>	2	0	1	6	巻号 <sup>GD</sup>	98
雑誌	論文標題 <sup>GB</sup>	An Anthropomorphic Approach to Presenting Information on Demand Response Reflecting Household's Environmental Moral							
	著者名 <sup>GA</sup>	T. Nakayama, H. Osawa and S. Okushima	雑誌名 <sup>GC</sup>	Proceedings of the 3rd International Conference on Human-Agent Interaction					
	ページ <sup>GF</sup>	329~332	発行年 <sup>GE</sup>	2	0	1	5	巻号 <sup>GD</sup>	—
雑誌	論文標題 <sup>GB</sup>								
	著者名 <sup>GA</sup>		雑誌名 <sup>GC</sup>						
	ページ <sup>GF</sup>	~	発行年 <sup>GE</sup>					巻号 <sup>GD</sup>	
図書	著者名 <sup>HA</sup>								
	書名 <sup>HC</sup>								
	出版者 <sup>HB</sup>		発行年 <sup>HD</sup>					総ページ <sup>HE</sup>	
図書	著者名 <sup>HA</sup>								
	書名 <sup>HC</sup>								
	出版者 <sup>HB</sup>		発行年 <sup>HD</sup>					総ページ <sup>HE</sup>	

欧文概要<sup>EZ</sup>

This research examines the energy poverty problem in Japan and the role of moral motivation in economic behavior from the perspective of climate change policy after the Great East Japan Earthquake. For this research purpose, it employs various poverty and vulnerability measures and an economic model of moral motivation which reflects an idea from Kant's categorical imperative. First the empirical result shows the aggravation of energy poverty among vulnerable households such as elderly and mother-child, resulting from both the escalation of energy prices and lowering income, during the past decade. Second the result also indicates the important role of moral motivation, which encourages people's electric power saving behaviors to a considerable extent if an proper information is given. When we consider the carbon pricing in Japan, it is necessary to examine an appropriate carbon price level and redistribution policy based on the above viewpoints.